私達の職場 23

離島に橋を架ける男達

「カチ，カチ，カチ，……」と，すきとおるような宵闇をぬけて夜廻りの拍子木が聞こえる．「火の用心，火の用心」の声の間に「ウオォーン，ワァーン」と遠吠えが響く，それはすでに忘れられた絵本の世界，六浦光雄のメルヘン，そして人工の音がすべて消え去るとそこには太古から連綿と続く波の音，風の音．ここは五島列島，長崎から海路を約 100 km の福江島を主島に，それより北へ約 100 km に散らばる島嶼群，その北端小値賀島である．

キリシタン哀史や倭寇の地，近世では補鯨，いまではスルメ・五島牛・サンゴの特産品，イワシ・アジ・サバ漁などで名高いこの島々，この小値賀島には 6 331 名（昭和 50 年 6 月 1 日）の人びとの生活がある．

比較的恵まれた家屋が安定した毎日を物語るこの島には佐世保港から日に 2 便の船路が約束されており，完備された浜津前目港はこの島の表玄関である．

だが，ひとたび海が荒れるとここは苦しい島々となる．日用品から野菜に至る生活のほとんどすべてを佐世保や長崎などに依存することもあって，船便を断たれることは大変なこと，17 号台風のときを例にとるまでもなくそこは文字どおり海の孤島となり，風が嵐が，荒波が静まるのを待たなければならないこととなる．これがまして，小値賀島のそのまた属島になると命にかかわることとなり，これらの小島の人びとにとってより大きな陸地としっかり結びつくことは先祖伝来の悲願でもあることだろう．自然の猛威に拮抗できるもの——〈橋〉が欲しい．それは，多分オカに住む人間では想像することもできない，執念とも言えるものでもあろう．

日が移り，技術が進み，経済がそれを許す．

すると島へと技術者が渡り，ここに建設への第一歩が記されることとなる．それは昭和 48 年度のことであり，完成は 53 年度であるという．

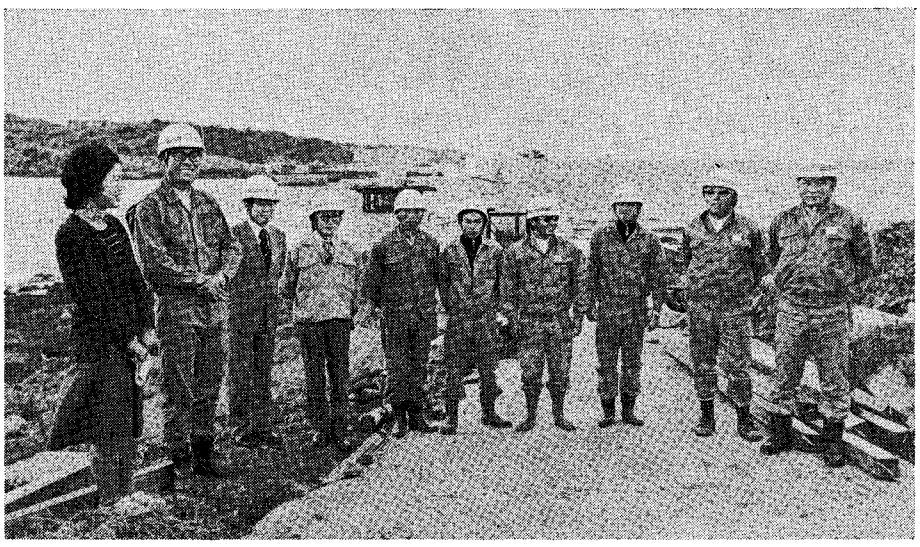
「島の大きさとか人口に比べるとだいぶ大きな橋ですがここまでくるにはかなりご苦労が……」

「長崎県は面積比でその 40% が島で海岸線の長さは日本一です．そこで，この種の事業はとても大切なんです．例えばここ小値賀と橋が架かる斑島の間ですが，渡海船の欠航が年間 80 日，この間，属島の人たちの生活が脅かされる．これを救うためには嵐の日でも安心して通ることのできる橋が必要になるわけです．これは病気等のことを考えますと命にかかわる」．平常でも白波をたてて流れる架橋地点を背に長崎県土木部の村岡和彦さんと県北振興局建設部の城下伸生さんが説明して下さる．

「しかし，投資効果という点では？」

「その辺は上層部の判断ですから存じませんが，現にここでは多くの島民が生活している．その方々が日々を平穏に送るための基盤づくり，これはわれわれに課せられた仕事です」．

橋長 290 m，2 径間単純 PCT 桁＋ランガー桁＋2 径間単純 PCT 桁，直接基礎とケーソン基礎を併用するこの斑橋は，年間 3 万 6 000 人を数える渡海船利用者に福音をもたらすはずである．



写真左から，村中，水島，村岡，城下，岡田（晴），山口，岡田（吉），小泉，広中，牛田の皆さん．

「城下さんはこの現場にいつも……」

「本当は常々きていなければならないのですが，所轄する地域が広くて人が少ない．そんな

こんなで，月に 1〜3 回ぐらいくるときもありますが，1〜2 か月も全くこなかったこともあります．長崎県の土木部には 10 か所の出先がありますが，そのうち4か所が離島にあります．これからもおわかりのように，1か所訪ねるにも他で考えられるように簡単にいかない．現にここへくるのにも1泊2日ですからね．それに，例の<欠航>がありますので，場合によってはもっとかかる」「大体欠航するような日は土木の仕事はできない（大笑）．だから，他へも行けないので宿でブラブラしているんです」．

県庁勤めの村岡さんは直前までは対馬ぐらし，対馬は長崎県とは言うものの経済的には福岡圏域とのこと，この五島をはじめそれぞれの島々は，何といっても交通手段がどこと結ばれているかによって大きく制約される．この周辺の島々が佐世保に頼っているように．

「船で4時間半ないし5時間半，玄海灘と天草灘の間を抜ける航路は良くゆれますが，お体は？」

「漁師の家で育ったのでそれはいいのですが，冬場はつらい．夏場は静かですから今度おいでの節は夏にされたら楽ですよ」と．

浜津前目港から白石基礎工事株式会社のお世辞にもきれいとは言えないコロナバンで現場へと向かう．途中は1車線の県道で，集落をはずれると舗装されたばかりの道，その両側に矮小な木々にタバコ畑，前席には港から斑島へと帰る女学生が同乗するほほえましさ．

「この島の生活はどうですか」

「平和ですね．高校が1校，お医者さんは3人おられますが，手術なんかは難しいようです」

「仕事が島民に喜ばれている，これが大きいですよ．すべてが善意に連なりますからね．そのかわり，あまりにも自然すぎてしまって，魚つり以外の娯楽もなく，色気抜きの飲屋が3軒ですか．だから仕事，また仕事で」ワッハッハと豪快に笑うは広中工事主任．茶色のサングラスが良く似合う好漢である．

「この現場の特長ですか」と牛田正治所長．さすがは一城の主，風格が他を圧する．

「何と言っても離島の工事であること，自然との闘いであること，それと国立公園内の工事であることです．具体的に申しますと，離島ですので木材1本たりともすべて本土から運んでこなくてはならない，重機もそうですし，われわれの食事，着物もすべてもってこなければならない．日用品も佐世保より3割は高いですね．次に波や風の関係で冬場の仕事ができない．どうしても 10 月，よくて 11 月上旬までにすべてを終わらさなければならない．と同時に，第一種特別指定地域だから骨材も全部運んでこなければいけない」．

12 月から 3 月にかけてはものすごい季節風に見舞われる小値賀，ささるような寒風が身を襲うという．名にしおう玄海灘，その向うは韓国である．

「こんなものが現場に良く漂着します」と水島修副所長さんが差し出す看板はハングルで書かれた何やら注意書らしいもの．海の国境線を現実に示すこの木片が，北海道に渡ると北方領土問題が身近に響くようになるのと同様に，隣国のナマの生活がそこに漂う．

ずっと白石に勤める作業員の方々とともにここに働く技術者諸兄は 10 人，現場事務所のすぐ裏にある宿舎ぐらしは見掛けよりはずっと清潔である．

「残業ですか，ここの現場の特質を考え青天井です．日曜日も休まない，休んでいられないのですよ．工程に合わせて漁師と同じおてんとう様相手の毎日ですので，60 時間から 80 時間ぐらい出ますか」「／」

6 時〜15 時，15 時〜24 時の2直制，それは寒くてつめたい季節風がくるまでに仕上げなければならないこの現場の宿命，久のしぶりに見る<すべてをなげうっての荒々しい前線部隊>である．

課長兼務の牛田さんは会議等もあって月のうち 10 日ぐらいは現場をあけると言う．その間は水島，広中両氏をはじめとする若者が背負う．

「家族と全員別居でしてね．自分の家へ帰るには1日では無理です．だから子供にとっては他人みたいなもの．“いつ島へ帰るの”と聞かれますよ」「この間なかなか生まれなかった子供に恵まれましてね，ここに妻もきていたのですが，不便でしょ，帰しました」「完成するまでがんばりますよ．最初から覚悟のうえで入ったこの世界，ここが終わったらまた次の土地へ行きます．同じ繰り返しですからね」，皆々船乗り同様な家庭生活を当然のごとく受け止め，ここに斑橋の基礎工事に邁進している．コンクリートの練り混ぜから品質管理そして試験に至るまですべて自前，朝7時からの勤務，島の人びとの暖かい協力を経て，間もなく橋脚は完成することだろう．ごくあたりまえのように．だれにほめられるということもなく．

ネクタイをしめた人には必ず挨拶すると言う素朴な土地柄，長さおおよそ 50 cm で約 1 000 円というブリや大きなイカなどの海の幸，陽光に恵まれたこの自然の里には間もなく他社が行う上部工工事を経て立派な斑橋が誕生することだろう．そして，そこに働き，健康なひとときを送った“土木技術者”の一群が間もなくその仕事を終えて家路につくことだろう，そんな日が見えるようだ．そして，橋が一つそこに残って想いはそれぞれの人生の中に埋没してゆく．それでいいんだよと．

（文と写真　河村忠男）